

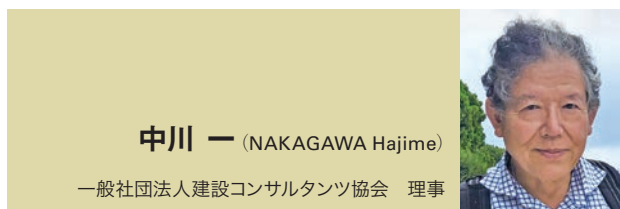
知的好奇心の旅のススメ ～ブラタモリ風～

1. はじめに

知っていると思っけてもそこを訪れてみて初めて気づく、納得する、感動することがあります。NHKのテレビ番組「ブラタモリ」は、単に知識を提供するだけの番組ではなく、地球科学的、地質学的、自然・人文地理学的、歴史学的根拠に基づいて「なるほどそうだったのか」と思わせる、納得させる仕組みをもった魅力ある番組です。私の旅連れもこの番組にはまっていて、いつの間にかブラタモリ風旅行と銘打って一緒に現地調査旅行に出かけています。そのような旅をいくつか紹介して、読者の皆様を小さな感動発見の旅へと誘いたいと思います。

2. 壘堤三兄弟への旅

日本で歴史ある特殊堤の代表と言えば壘堤でしょう。壘堤は通常コンクリート製で、壘の厚さ分の隙間のある枠からなり、枠のサイズは壘がちょうど入るサイズで、周辺住民が壘を持ち寄り隙間に壘をはめ込んで越水を防ぎました。そこで、私の旅連れが「壘堤を勉強する会」と称して壘堤の現地調査をしようということになりました。以前、揖保川の壘堤（写真1a）を某研究会で現地調査したこともあり、新たに長良川の壘堤（写真1b）を調査することとなりました。2017年6月に木曾川上流河川事務所の案内で事務所近くにある長良川左岸の壘堤（岐阜特殊堤：昭和13年3月竣工）を見学しました。この時驚いたのは壘堤よりもむしろ大宮陸閘をはじめとする陸閘、防水壁、防水扉



京都府城陽市出身。京都大学名誉教授 工学博士
京都大学工学部交通土木工学科卒業。同大学院工学研究科修士課程修了。
1981年4月に京都大学防災研究所に入り、京都大学防災研究所自然災害研究協議会議長、京都大学防災研究所長、京都大学評議会評議員を歴任。
専門分野は洪水、高潮、津波、土石流、泥石流、斜面崩壊などによる災害現象の解明と水災害の防止・軽減。生態系に配慮した河川再生と保全、河川堤防決壊のメカニズムと対策。

等の止水施設の多さです。今や壘堤はその役目を終えたものの、陸閘などの新たな河川管理施設がその役割を現在も担っていました。高い堤防ではなく、景観に配慮した治水施設としての壘堤の精神が現在の施設にも受け継がれている思いがしました。

時間があつたので金華山に立ち寄りました。地質が専門のA氏がその途中、「この山はチャートが多いんだ。チャートは放散虫の化石からなっていて、これは地質年代特定の革命を起こしたんだ。」と言って露頭からチャートを手に取って示してくれました。これ以降の旅は地質や地形の話が多いA氏の解説付きブラタモリ風の旅となりました。

宮崎の五ヶ瀬川にも壘堤（写真1c）があるとのことと2018年8月に延岡市を訪れました。延岡河川国道事務所の案内で、五ヶ瀬橋左右岸で保存されているアーチ状の美しい曲線を持ったコンクリートラーメン構造の壘堤を見学しました。この壘堤は大正末期

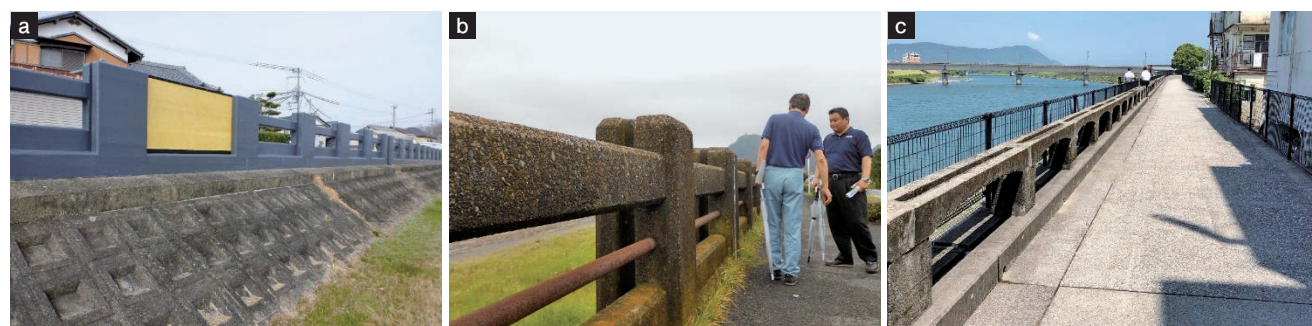


写真1a, b, c 壘堤三兄弟（左からa: 揖保川（丸井英一氏提供）、b: 長良川、c: 五ヶ瀬川の壘堤）



図1 四万十川の穿入蛇行発達域と四万十川の河口

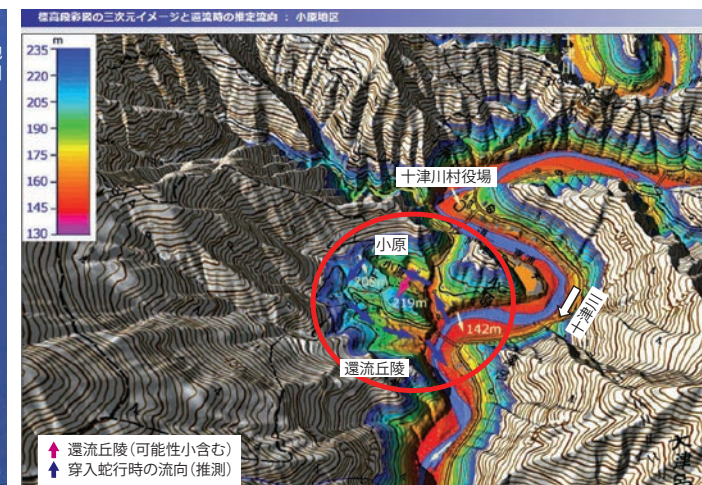


図2 十津川村役場付近の還流丘陵 (https://www.web-gis.jp/GM1000/SelfSelect/Self-Select_161.html)

(1920年)～昭和初期(1934年)に竣工した我が国で最も古い壘堤と言われています。現在も「五ヶ瀬川の壘堤を守る会」が壘堤を紹介するDVDやパンフレット、壘堤を模したサブレなどを作成し、保存活動を行っています。同会のメンバーと意見交換会を持つ機会を得て、設置の経緯や堤防の役目を終えた後の具体的な保存活動について説明を受けました。その際、なぜアーチ形の形状になったのか各々が妄想を語り、大いに盛り上がりました。普段の素晴らしい河川景観を守るために壁のような堤防ではなく、景観にマッチした風情のあるアーチ形の壘堤とし、洪水時には住民が壘を持ち寄って住民参加型の水防活動をするという、役所と住民との協働がなされていたのではないか、ということで妄想はまとまりました。壘堤三兄弟の旅は治水の在り方に思いを馳せる旅となりました。

3. 穿入蛇行河川への旅

もう一つブラタモリ風知的好奇心の旅を紹介しましょう。コロナのまん延防止措置が解除されて2022年11月に、四万十川の穿入蛇行並びに付加体の調査と銘打って同じメンバーで旅に出ました。

四万十川流域はフィリピン海プレートの沈み込みにより大陸側に付加された地層域であり、四万十川中流域では穿入蛇行が発達しています（図1）。驚いたのは、約十数万年前まで四万十川は今の流れとは逆に東側へ流れていて、今の伊与木川の河口が四万十川の河口だったことです。今の与津地川は四万十川の上流の支川ですが、この川も約十数万年前までは四万十川の下流側にあり、興津の辺りがその河口とのことでした。約10万年以降隆起が大きくなってこれま

での流路では流れなくなり、現在の流路となりました。これらのことをA氏が（ブラタモリを意識しつつ）準備してくれた資料で確認し、現地も訪れて穿入蛇行と還流丘陵（穿入蛇行が発達後、ショートカットにより取り残された丘陵地）、四万十川の逆流といったダイナミックな動きを感じ取ることができました。また、付加体の一部にチャートやメラングジュ（地層が圧縮力による変形作用を受け、レンズ状のレキを含む形態の岩石）を確認することができました。ブラタモリ的知的好奇心が満たされた旅でした。

2023年11月には、紀伊半島を流れる新宮川水系熊野川へ穿入蛇行のブラタモリ風調査旅行をしました。鯨のフルコースの夕食と温泉付きです。熊野川支川の四村川や十津川の還流丘陵を訪れました（図2）。フィリピン海プレート、付加体、紀伊半島の巨大カルデラ、多数の温泉と巨石群（例えば古座川の一枚岩）の半円状の分布、那智の滝、橋杭岩、フェニックス褶曲、千壘敷…、これらを一括して説明してくれる南紀熊野ジオパークを是非訪問し、実際に現地を訪れてほしい。きっと新たな発見と感動があるはずです。私たちもそうでした。

4. おわりに

最近体験したブラタモリ風好奇心の旅を紹介しました。紙幅の都合もありうまく説明できませんでした。読者の皆様にもこのような気ままに自己満足の旅を是非ともお勧めしたいと思います。新たな発見や感動があるはず。脊柱管狭窄症に悩まされながらも私の知的好奇心の旅は止むところを知りません。